

2015年5月10日主日礼拝

説教「母の祈り」

サムエル記第一 1章 1-20節

【ハンナの悩み】

ハンナには、子どもがいませんでした。けれどもハンナの悩みは、ただ子どもが生まれないということだけではありませんでした。もうひとりの妻ペニンナが、「【主】がハンナの胎を閉じておられるというので、ハンナが気をもんでいるのに、彼女をひどくいらだたせるようにした」(6)のです。

子どものいるペニンナが子どものいないハンナをねたんで、憎むというのはおかしなようですが、夫エルカナがハンナを愛したからでした。聖書が決して励ましていない、一夫多妻の結婚がもたらした歪みとも言えます。その歪みの中でハンナは苦しみました。男性の典型のようなエルカナは何も気づかないで助けになりません。夫婦であってもわからない領域があることを思わされます。

【心を注ぎだす祈り】

「私は【主】の前に、私の心を注ぎ出していたのです」(15)とハンナは祭司エリに語ります。ハンナは、男の子を授けてください、と淡々とお願いしていたわけではありませんでした。そうではなくて、激しく泣かずにおられない心の痛みを、神さまに訴えたのでした。「心を注ぎ出す」。この「心」は、もともとは「熱い息」

という言葉。自分の息を全部吐き出す。からっぽにする。自分という存在を、そっくりそのまま、神さまに差し出す。これがハンナの祈りでした。

神さまは、私たちにどのような祈りをお求めになるのでしょうか。私たちは、ときに人と自分の祈りを比べて、「あの人の祈りはすばらしい」とか「私は祈りが下手なので当てない」と言います。けれども神さまが求められるのは、上手な祈りではなく、心を注ぎ出すことです。

紀元2世紀の教会の指導者・アレキサンドリアのクレメンスは「祈りとは神との友情を育てることだ」と言いました。友情といっても、決して私たちが神さまと対等ということではありません。対等でないのに、神さまが私たちがみ込むようにして、視線を合わせてくださる。そして、さあ、何でも話してごらん、とおっしゃってくださる。何でも受け止めてくださる。受け止めて、私たちの心をいやし、健やかにし、ご自分に似た者にしてくださる。それが、神さまの友情なのです。

私たちが、悩みの中に置かれるとき、神さまとの友情を育てることができるようにと、願いたいものです。悲しみの目に思い切り神さまの前で嘆くなら、神さまがどれほど近づいてくださっているかを知ることができます。

【顔が変わったハンナ】

神さまの前に心を注ぎだし、神さまとの友情

を育てたとき、「彼女の顔は、もはや以前のようではなかった」(18)とあります。このとき、まだ、子どもは与えられていません。ペニンナのハンナに対する憎しみも変わっていません。けれども、ハンナは以前のハンナではありません。もうペニンナは、以前のようにハンナをいらだたせることはできません。なぜなら、ハンナには神さまとの友情があるから。ハンナは自分が神さまに受け入れられていることを知っているからです。

私たちが心を注ぎだして祈っても、問題はまだなにも解決されていないように思えることが、ほとんどでしょう。けれども祈る前と後では、私たちは同じではありません。そして変えられた私たちを出発点にして世界が変わって行くのです。神さまが変えてくださるのです。

【献げられたサムエル】

やがて生まれたサムエルを、ハンナは喜びをもって主にお献げしました。サムエルは混乱の時代のイスラエルを導き、ダビデに油を注ぐという大きな働きをすることになります。そんなことは夢にも考えていなかったにちがいないハンナ。けれども世界を変えたそんな大きな出来事は、ハンナが心を注ぎだして祈ったときに始まりました。ひとりの人の苦しみは、それが家庭の中の問題であっても、神さまにとって、どうしてもよいことではありません。神さまは私たちに心を留めてくださっているのです。